

シューマンと

「ダヴィッド同盟」の思想

―飽くなき独創性の追求

文・西原稔(音楽学者、桐朋学園大学特別招聘教授)



シューマン(画:アドルフ・フォン・メンツェル)

シューマンの作品は同時代のリストやショパンとは異なります。

彼はドイツ文学を重要な創作の源とし、自身の音楽創作のなかに様々な形で文学の要素を織り込みました。

また彼はとくにバッハやベートーヴェンの伝統を重んじつつ、伝統に縛られない新しい芸術を開拓しました。

音楽評論活動も彼の重要な側面です。

芸術の本質を追求する団体としてダヴィッド同盟という架空の団体を作りました。

彼は独創的であることを終生、追求しました。

「ダヴィッド同盟」の思想

シューマンは自身の音楽批評において、浪漫派の多くの作曲家が古典的なピアノ・ソナタをデビュー作品とし、それに「作品1」という番号を与えていることを批判し、過去の音楽手法をただ踏襲しただけで独創性が顧みられていない点につよく憤りを表明した。真の芸術とは何かという命題を掲げ、それを追求したのがシューマンである。

シューマンの創作は時期によってその傾向を異にする。1830年代はほぼ全作品がピアノ作品の創作で占められ、1840年は歌曲、1841年は管弦楽、1842年は室内楽が集中的に作曲された。健康を害した後の1845年からライン川に投身自殺未遂を起こす1854年までの創作もまた大きく異なる。それぞれの時期において創作傾向



ドレスデン時代のシューマン夫妻(1847年)

Robert Alexander Schumann

シューマンの評論活動と創作

シューマンは「音楽新報」誌で、幅広く音楽評論を手がけた。彼において評論は創作と密接に結びついていた。シューマンの批評によってその才能が見出された作曲家は多い。ショパンの「モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の「奥様お手をどうぞ」の主題による変奏曲」作品2を、シューマンは「諸君、脱帽したまえ、ここに天才がいる」という言葉で高く評価し、ブラームスを「新しい道」と題する批評で世に知らしめたのはよく知られている。彼らだけではなく、アドルフ・ヘンゼルトやシユテファ・ヘラーもシューマンによってその才能を見出された。

シューマンの音楽評論活動は1830年代を中心とするが、この鋭い批判精神はこの時期の彼の創作とも密接に結びついていた。シューマンほどこの時代のさまざまな作品を幅広く

がさまざまに変化しているが、一貫しているのは独創性の飽くなき追求であった。その思想は彼の「ダヴィッド同盟」という言葉によく示されている。シューマンの「ダヴィッド同盟」の思想は「謝肉祭」作品9の終曲の「ペリシテ人と闘うダヴィッド同盟の行進」や「ダヴィッド同盟舞曲集」作品6などの作品に表現されている。

「幻想」という理想

ロマン派文学は現実よりも架空の世界を題材としたが、シューマンはとくにE・T・Aホフマンの小説から多くの影響を受けた。ロマン派では「幻想曲」という標題が好んで用いられた。それは定まった形式から解放された自由な感情の表現への要求と結びついている。シューマンも「幻想」と題した作品を数多く手がけた。「幻想小曲集」作品12や「幻想曲」作品17、「幻想曲集」作品111などのピアノ作品のほかに、ヴァイオリンとチェロとピアノのための「幻想小曲集」作品88、クラリネットとピアノのための「幻想小曲集」作品73、ヴァイオリンと管弦楽のための「幻想曲」作品131などの作品を残している。

「幻想小曲集」作品12は当初、各作品に詩を掲げることが構想されていた。「幻想曲」作品17はベートーヴェン記念碑の建立計画と結びついており、作品の冒頭にフリードリヒ・シュレーゲルの詩の一節を記し、第1楽章ではベートーヴェンの歌曲「遙かなる恋人に寄せる」作品98の動機が引用され、この作品でも言葉と音楽との融合が図られている。

ホフマンの小説との結びつきをよく示しているのは「クライスレリアーナ」作品16である。天才的であるがいきさか常軌を逸している楽長クライスラーと人間の言葉を解する天才的な猫の物語が緩い関係で結びついたこの小説は、シューマンに強い影響を与えた。ホフマンは小説の主人公クライスラーを題材とした「クライスレリアーナ」という短編集を著わしているが、このタイトルをシューマンは自身の作品に取り入れている。面白いのはこの作品では、バロック時代のシチリアーナやフランス風序曲、フーガなどの表現が用いられている点で、まさに万華鏡を見るかのような作品に仕上がっている。

1810年6月8日

1830年

1832年

1834年

1835年

1836年

1837年

1838年

1839年

1840年

1841年

1842年

1845年

1848年

1850年

1854年

1856年

シューマン誕生

「アベック変奏曲」作品1作曲

「パピヨン」作品2作曲

「音楽新報」創刊

クララ・ヴィークとの恋愛が始まる。

「ピアノ・ソナタ第1番」作品11作曲

母ヨハンナ没、「幻想曲」作品17作曲

「幻想小曲集」作品12作曲

「子供の情景」作品15、

「クライスレリアーナ」作品16作曲

クララとの結婚をめぐるクララの父との法廷闘争

クララとの結婚。「詩人の恋」作品48など

歌曲を数多く作曲「歌曲の年」

管弦楽の年。「交響曲第1番」作品38、

「交響曲第4番」作品120作曲

室内楽の年。3曲の「弦楽四重奏曲」作品41、

「ピアノ四重奏曲」作品47、

「ピアノ五重奏曲」作品44作曲

1845年 精神の不調。

ライプツィヒからドレスデンに転居。

「ピアノ協奏曲」作品54完成

「子供のアルバム」作品68作曲

デュッセルドルフに移り、市の音楽監督に就任し、

指揮者として活動を始める。

「チェロ協奏曲」作品129、

「交響曲第3番《ライン》」作品97作曲

知っていた音楽家はいない。とくにピアノの練習曲の批評ではバッハに遡って網羅的にさまざまな作品を体系的に纏めている。シューマンの練習曲への関心はヴァイオリンの鬼才パガニーニの「カプリス」作品1にも及んでおり、シューマンは「カプリス」のなかから12曲を、作品3と作品10という2つの曲集で編曲している。彼の練習曲の思想は「交響的練習曲」作品13に結実している。

1840〜45年の創作

シューマンの創作は時期によってその傾向を大きく変化させる。1830年代のピアノ創作の時代の後の1840年から1845年が一つの時代をなす。この時代の創作の特色を以下の点にまとめる。

1 声の表現可能性の追求

シューマンはクララとの結婚が実現した1840年に、憑りつかれたかのようにリートへの創作に没頭する。この年は「歌曲の年」と呼ばれ多くの歌曲集が作曲された。この歌曲の創作で彼が目指したのは詩人の詩の解釈である。「詩人の恋」ではハイネ、「リーダークライス」作品39ではアイヒェンドルフ、「女の愛と生涯」作品42ではシャミッソーの詩を用いているが、シューマンはこれらの歌曲集の表現を変えている。

2 古典的な世界への眼差し

1841年に管弦楽の創作に着手し、1842年に室内楽の創作に取り掛かるとき、彼はハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの古典的な世界に立ち返っている。1830年代の創作では伝統的な形式からの自由が強く意図されていたのに対して、交響曲や室内楽作品では伝統的な形式に立ち返ってそこに自身の創意を注ぎ込む。

3 バッハの再評価

1844年から45年にかけて精神の疲労のために創作を中断する。その後、一家はライプツィヒからドレスデンに移り住み、彼はバッハの作品研究に従事する。その成果が、すべてカノ

引用の美学

シューマンの創作の特色の一つに「引用」がある。シューマンはピアノ作品だけでなく室内楽作品においても、様々な形で他の作曲家や自身の作品から旋律を引用した。彼ほど広範に引用を行った作曲家は例がなく、もっとも多いのは恋人クララ・ヴィークからの引用である。それはクララとの親密な関係に由来しているだけでなく、作曲家でもあったクララの創意へのオマージュである。引用でもっとも典型的なのは「ピアノ・ソナタ第一番」である。第一楽章の序奏では自身の歌曲「アンナに寄す」が引用され、主部ではクララの「ピアノのための4つの性格的小品」作品5の第4曲「幻想的情景」とシューマンの未完の「ファンダンゴ」の旋律が引用されている。

「謝肉祭」の「ドイツ風ワルツ」でもクララの旋律が引用され「ダヴィッド同盟舞曲」の第1曲でもクララの旋律が引用されている。上記の様に「幻想曲」の第1楽章ではベートーヴェンの歌曲が引用されている。「ピアノ四重奏曲」作品47ではプロテスタント・ルター派の讃美歌が織り込まれている。

このような引用はこれまでの創作とは全く異なる効果を生みだす。作品の中に他者の旋律を織り込むことによって、彼はある言語的なメッセージを伝えようとした。もっとも興味深いのは、当時の俗謡「爺様が婆様を娶った時」を「パピヨン」作品12と「謝肉祭」作品9のそれぞれの終曲で引用した例である。芸術音楽の中に突如、大衆的な旋律が登場することで、これ聞いた当時の人々は驚きを覚えたことであろう。この俗謡はペリシテ人（大衆）を表しているであろう。



クララ・ヴィーク



DÜSSELDORF UM 1850

ライン川の橋(1850年の版画)

ンで作曲された「ベダル・ピアノのための6つのカンソ練習曲」作品56や「BACHの名前による6つのフーガ」作品60などの作品である。そしてシューマンは1850年、バッハ協会の創立の発起人に加わり、バッハ再評価に大きく貢献することになる。

1846年からの晩年の活動

この時期の彼の創作のもっとも大きな特色は、子供のための作品の創作である。そのきっかけはクララとの間に生まれた長女マリーのための作品で、それは「子供のアルバム」作品68として完成された。マリーの成長日記ともいべきこの作品は、これまで独創的で革新的な創作に打ち込んできた創作態度とは異なり、子供の感性に即しているという点で画期的である。

シューマンは1850年、指揮者としてデュッセルドルフに移り住む。雄大なライン川やケルンの大聖堂から大きな示唆を得て、「交響曲第3番《ライン》」作品97や「チェロ協奏曲」作品129が作曲される。そして1851年、シューマンはヴァイオリン奏者でゲヴァントハウス管弦楽団のコンサート・マスターのダヴィッドの勧めもあり、ヴァイオリン・ソナタの創作に着手する。しかし、指揮者としての仕事は彼に強い精神的な負荷を与え、ふたたび次第に精神を病んでいくことになる。

シューマンは1852年に「ミサ曲」作品147と「レクイエム」作品148を作曲するが、ルネサンス様式を取り入れたこれらの作品は、それまでの躍動的で、幻想的な彼の創作と打って変わって、静かに黙想するような楽想である。作品番号のある最後の作品「朝の歌」作品133は最後の時期のシューマンの心境を映し出している。